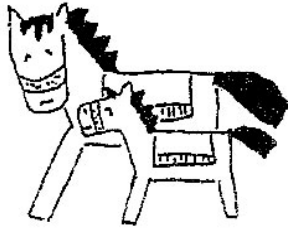


お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと



令和4年 10月 No.335

〒760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松第二保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<https://oumanooyako.com>



(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～			10月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
10月	6日 20日	木	こうさぎおはなし会 15:00～16:00	二人の専門の方が楽しいおはなし会をしてくれます。どなたでもおいでください。
10月	7日 21日 28日	金	ヨガを楽しむ会 14:30～16:00	すこし朝夕涼しくなり、おいしい物も多くなる多くなる秋です。しっかり体を動かしましょう。
10月	15日	土	おとなアート 14:00～16:00	ひもとアルミの異素材の組み合わせを楽しみながらオイルパステルで色を重ねて描いていきます。
10月	16日	日	香川みすゞさんの会 13:00～15:30	まなびCAN 3階で矢崎先生の講演、朗読、対談などあります。羽尻先生の原画展も同時開催。
10月	17日 24日	月	体験保育 15:00～17:00	やっと日陰の園庭で遊べるようになりました。小さな砂場もありますのでどうぞ。

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放していますので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談(月～土) 9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。

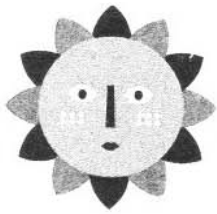


四つ辻
誰か知らないお客さま、
知らない道をかかない
おうちの道をきかない
すねてお家をぬけたゆえ、
秋の夕ぐれ、四つ辻に。
ちはるりちはるりと散る柳、
たれなみちをきかないか。
お家のない旅のひと、
知られなみちをきかないか。

金子みすゞ「空のかあさま・下」より



☆今月の内容 — 「小学校に行っても困らないようにを考える」
清水 玲子



「小学校に行っても困らないように」を考える

清水 玲子 著

ある保育園の園長先生から聞いた話。年長クラスのお母さんから、「保育園の給食で、パンにつける袋入りのジャムってでますか?」と聞かれたのだそうである。えっ? と思ってよく聞いてみると、小学校入学の説明会で配られた「入学前にできるようにしていただきたいこと」のなかに、給食のときにでるジャムなどの入った小さなビニールの袋を、自分で開けられるようになってほしいということがあったそうだ。保護者たちが、そうしたことのひとつひとつを小学校入学前にクリアしなければいけないと心配し、焦っていることがよくわかったという。ほかに、「和式のトイレも練習をしておいてください」なども書かれているようである。

保育者がとりくもうと思った活動に参加してこない子どもがいた場合、どうするか、ということが保育の課題としてよく話題にのぼる。そこでは、子どもはひとりひとり、そのときに思っていることがあり、基本的にはその子の思いをできるだけよく知って対応すること、その子の気持ちを尊重しつつかわりを考えていくことが語られていると思うのだが、四、五歳になると、ようすが変わってくる。

たとえば、運動会で竹馬をやろうということになったとする。そのときに竹馬をやりたくない子かでてきた場合、なんとかしてその子にも竹馬をやらせようとする。年長クラスくらいになれば、みんなでやるとりくみが自分にとってうれしくない場合でも、「やらないとがんばりつづけるのはわがままである」ということらしい。

やらせるべきだという保育園の先生に、「やりたいとかやりたくないとか子どもが言ったとき、その子のそのときの思いをきちんと知ることが大切なのは?」と言ったら、「学校に行ったら、自分の気持ちとは関係なく、そのときにすべきこと(勉強や課題)をやらなくてはならなくなるので、年長になったらやりきれるように指導することがその子のためだと思う」と言われた。そのときの自分の気持ちで自分の行動を決めてよいと子どもに思わせてしまっただけは、結局、その子は学校に行ってから困ることばかり起こり、その子がかえってか

わいそうだというのである。

さらに、やらないと言っている子を、まわりの友だちがいろいろ説得するような「話し合い」をしてがんばれるようにするというクラス運営をしているところもあった。年長クラスを担当するのは、こんな意味でもなかなかたいへんだ。

でも、ほんとうにそれでよいのだろうか？ 小学校に行ったときに困らないように、ということばかり考えて、いま、目の前の子どもたちがなにを感じ、どう考えているのかから保育を出発することをやめてしまうのは、子どもを理解することをやめてしまう危ういことと思えてならない。小学校という新しい世界に行って、それまで知らないことを体験していくときに、困らないようにすることなんてできないのではないだろうか。困らないための先取りはどこまでいってもきりがなく、そんなことできっこない。

わからないことやできないことにぶつかって困っても、先生に話したり友だちに聞いたり、どうすればよいかかわかってさえいけばよいのではないだろうか。それには、先生は、自分が困ったら相談に乗ってくれる人なんだとか、友だちも聞いてくれる存在だと子どもが安心できていることが必要だ。

つまり、自分やまわりへの信頼をもてる子どもに育ていけば、自分でまわりの力を借りることもできて、あたらしい場に行くのもこわくない。なせなら、その子はひとりぼっちではないからだ。ジャムの袋が開けられなかったら、そのとき、どうしたらよいか、その場で考えたり相談してやってみたりして、学んでいけばよいのではないだろうか。そうした人間信頼の基礎をつちかうことが、この終わりのない不安を解く鍵だと思うのは間違っているだろうか。

著書「うしろすがたが教えてくれた」より

清水玲子（しみずれいこ）

1947年埼玉県生まれ。元東洋大学ライフデザイン学部教授。乳児保育、保育原理などを担当。保育実践研究会代表・さんこうほれんメンバー

著書：『保育園の園内研修』（筒井書房）、『育つ風景』（かもがわ出版）、『徹底して子どもの側に立つ保育』（ひとなる書房）、『保育における人間関係発達論』（共著・ひとなる書房）、『いい保育をつくるおとな同士の関係』（共著・ちいさいなかま社）、『育ちあう風景』（ひとなる書房）ほか。

～連絡ノートや送迎時の「伝え方」についての保護者の声～

■連絡ノートは信頼関係づくりの手立て

日々保育者から言葉をもらうことで保護者は励まされ、信頼関係をつくっていきます。

「毎回一人ひとりを見ているんだなと思われるエピソードをお話しいただいたり、連絡帳に書いていただいているので、そこは安心してあります」

した。育児日記のように保管しています。特別なエピソードではありませんが、平日は毎日、5年間お世話になる保育園として安心して預けられる、という安心と信頼につながり、先生に感謝しています」

■愛してもらえて共感してもらえるのがうれしい

「子どものおもしろかわいいエピソードをきくと、聞くたびに笑い転げて元気になるし、先生方がげらげら笑いながら報告してくれると、大事にされているんだなと感じてすごくうれしいです」

「一緒に喜んでくれたり、一緒に悔しがってくれるのが一番うれしいです。たとえば、乳児の時は、今日は、うんちでたよーみたいなことでも、うれしそうに話してくれると、いろんな大人に愛されてるなーとうれしくなり



■具体的な話がうれしい

特にわが子の姿を具体的に伝えられるとうれしいもの。お迎えのときに、口頭で特別なエピソードを聞けると、元気がチャージできます。

「その日の姿を教えてくれるのでお迎えが楽しみです。年長の娘は、異年齢保育のため、年少、年中さんも一緒です。昼食の準備のため、テーブルを拭く仕事を娘が年少さんに教えていたとき、年少さんが『ぼくはこうやりたい！』と自分なりにやっていたそう。『そうやってやりたいんだね。』と思いを受け止めた上で教えていたらしく、お迎えのときに『すてきでした。大人の私も勉強になりました！』と先生が伝えてくれてうれしかったです」

「しゃべったことや、やったことを、具体的に聞けるとうれしい。『〇〇って言ってたので、〇〇って聞いたら、〇〇って言ってましたよ～』など。『おしゃべり上手にしていました』だけだと、園では何をどうしゃべってるんだろう？気になります」